

学童疎開

古田京子

野方五丁目

私と同年代の多くの人は疎開を体験しています。

私も福島へ集団疎開をしました。当時、私は小学校六年生で、昭和十九年八月末から小学校を卒業する翌二〇年三月まで、いわき市小名浜上神白に疎開していました。六年生の男女と五年生女子の約一五〇名が国元館という旅館と一緒に生活をしていました。旅館の大きさの理由からか五年生の男子は私共と離れていて、めったに会うこともありませんでした。また、三、四年生も、駅がいくつ離れているのかも知らぬ所へ疎開していました。ですから、三年生だった私の妹に会うことができたのは、たった一度だけでした。兄妹のいる子が先生に連れられて会いに来たのですが、それも一泊だけで、この次にいつ会えるかわからず、悲しくて、泣き泣き別れたことを今でも思い出します。

今のように自由に汽車には乗れず、切符も買えない時代ですから、親が面会に来ることなどなかなかできません。それでも私の母は、月に一度は何とか工面して、私のいる小名浜と、妹

のいる所へ必ず面会に来てくれました。その時は配給の砂糖を
といてアメを作り、先生に内緒で持って来てくれました。当時
は砂糖などなくて、貴重品でしたから、父母のタバコの配給と
砂糖を交換して持って来てくれたのでしょう。それを夜、布団
を敷いてからこっそり、同室の友達となめたりしたものです。
先生にみつからぬように上手にしないと、先生に取り上げられ
てしまいます。先生は、とりあげたお菓子をその後どうしたの
かわかりません。

疎開した当時は、電気はなく、ランプの生活でした。部屋は
四人で六畳一部屋でした。五年生と六年生が同室でしたが、自
分のことは自分でしなければなりません。ですから洗濯も自分
のものはタライで洗濯しました。石ケンなどはまるつきりあり
ませんでしたから、自然にノミやしらみがわき、髪じらみがつ
くと、それは大変なものでした。友達同士でつぶし合ったこと
を思い出します。

食事は三食食べられましたが、馬れいしょ、さつまいも、麦

の他、私達の知らないものが沢山入っているごはんでした。食べたい盛りの子供にとつて、出された食事以外は、何一つとして食べるものがないというのは、かなしく、つらいものです。胃腸薬の「エビオス」「ワカモト」などを面会の時に持ってきてもらいました。少し甘いのでおやつ代わりに食べたものです。かえって余計にお腹がすくなどは、その頃は知らず、とにかく口がさみしく、食べたかったです。また、松ぼっくりの中の小さなゴマつぶ位の実を食べたものです。

国元館の水は硫黄くさくてなかなか飲めず、何人かで近所の家へ水をもらいに行きました。この硫黄の水に慣れるまで、ずい分苦労しました。山の中へたき木を取りにも行きました。皆で背負って、何回も運んだことを思い出します。

毎日の勉強は、この国元館で座学で授業をしていました。途中からは四キロほど離れた江名小学校へ授業をうけに行きました。男子が一組、女子一組でした。今と違って、男女は別のクラスですので、男の子と話をすることなどない日々でした。

私達六年生は女学校へ入学するために、三月中に東京へ帰って来ましたが、下級生は終戦まで福島にいました。終戦後、間もなく父が妹と近所の同級生を数人連れて帰ってきました。

それから三四年経ってから、私達北原小学校七回生は、現在の小学生らに送っていただき、学校で出来なかった卒業式をしてもらいました。そして当時六年生だった男女と、先生お二人

で、なつかしい疎開先の国元館を訪ねました。当時お世話になった寮母さんにもお会いできました。国元館の中は少しは変わっていましたが、まだまだおもかげが残っていました。国元館で一泊し、昔話しに花をさかしました。江名小学校へも行ってみましたが、小学校は幼稚園に変わり、古いトンネルもきれいになっていました。けれども私達には、懐かしいところばかりでした。こうしてあの頃のつらかった思い出を、なつかしく、楽しく話しあえたのは、今が平和だからでしょう。